

地域福祉を支える「地域の居間」としての シルバーサロンの利用向上のための一考察 三重県名張市のふれあい・いきいきサロン事業を対象として

松浦健治郎*, 浦山益郎**

Kenjiro MATSUURA and Masuro URAYAMA
(建築学科 Department of Architecture)

(Received July 30,2010)

This paper aims to clarify the condition and possibility of community management of silver salon to support community welfare , by analyzing case of Fureai Iki-iki salon project of Nabari City, Mie Prefecture.

Findings are as follows: 1) there are many salons which are used seldom, 2) senior people take care of salons and senior and young people provide salons' program , 3) it is necessary to get supporters' help to be able to manage salons continuously , 4) it is necessary to increase experience of participation to increase supporters , as experience of participation results intention to support , 5) it is effective to send information such as invitation and holding mini event to increase experience of participation.

Keywords : community welfare , silver salon , living room for the community , Fureai-Ikiiki salon , Nabari City

1. 研究の概要

(1) 研究の背景と目的

高齢者が安心して地域に住み続けるためには、在宅介護を支援するデイサービスセンター等の福祉施設が存在や配食サービス等の福祉サービスが重要となるが、それと同時に、気軽に立ち寄ることのできる「みんなのリビングスペース」、言い換えれば地域の居間のような場所（シルバーサロン⁽¹⁾）が必要であるとする（図1）。特に一人暮らし高齢者や高齢者夫婦世帯にとっては、シルバーサロンが身近にあると、生活する上で不安の解消、閉じこもりの防止、介護予防に繋がる。

社会福祉協議会が進める「ふれあい・いきいきサロン」⁽²⁾は地域の居間としてのシルバーサロンになり得ると考える。本研究では、三重県名張市のふれあい・いきいきサロン事業を研究対象として、シルバーサロンの管理運営・利用の実態から開催頻度が低く、利用者があまり多くない現状を把握した上で、地域住民による利用が向上する条件を明らかにすることを目的とする。

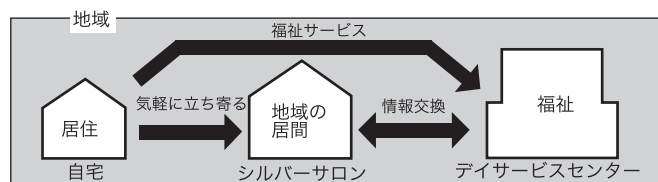


図1：シルバーサロンの位置づけ模式図

(2) 既往研究との関連

介護保険の対象である宅老所（小規模デイサービス施設）については、宮崎幸恵ら²⁾が管理運

営の課題を明らかにしている。小松尚ら³⁾は、地域の居場所としての交流の場について、戸建て住宅と空き店舗という建物タイプの違いから、その運営の特徴を分析している。ふれあい・いきいきサロンについて、中村久美⁴⁾は宇治市の11のサロンを対象としてサロンの実態と意義を明らかにしている。森常人⁵⁾はサロン活動が人間関係の構築にどのような影響を与えているかを分析している。

本研究では、市町村の社会福祉協議会が設立し、全国的に普及しつつある、ふれあい・いきいきサロン事業、その中でも高齢者が集まる場としてのシルバーサロンに着目し、地域住民による管理運営・利用の実態を明らかにした上で、地域住民による利用が向上する条件を明らかにする点に特徴がある。

(3) 分析の視点

森常人によると、「多くのサロンに共通する課題を総括すれば、その課題は、『活動プログラムの作成』、『運営スタッフの確保』、『参加者の確保や拡充』の3つに集約できるが、それに対する有効な解決策や手だては示されていない」という。そこで、サロンの利用が向上する条件として、1) 開館頻度、2) プログラム、3) 管理運営を担う人材、に注目する。開館頻度が高ければ気軽に立ち寄ることができ、サロンで活動プログラムやイベントがあれば、新規参加者は参加しやすく、両者を充実させるためには管理運営を担う人材が必要だと考えたからである。なお、管理運営を担う人材については、鍵の開け閉めや予算管理等の施設の管理を担当する「運営管理者」とサロンでの活動プログラムの提供等の各種サービスを提供する「運営協力者」に分けて、以上の3つの視点から分析を行う。

(4) 研究の対象

研究対象として取り上げた三重県名張市は、大阪まで約60kmという地理的条件から、昭和40年代以降、関西圏のベッドタウンとして、郊外に大規模な住宅団地が開発され、人口が急増した。近年の名張市の人口は、減少傾向にある。中心市街地・農山村集落・郊外住宅団地という地方都市の3つの典型的な居住地があることから、地方都市の典型として選定した。人口千人あたりの施設数について、社会福祉協議会活動実態調査報告書(全社協)によると、全国平均は0.31である。三重県社会福祉協議会調査(2007年)によると、市町全体の平均が0.35で全国平均0.31に近い。さらに、三重県の中で、サロンが1つもない8市町を除く21市町の平均は0.78であり、名張市は0.74であることから、名張市はサロンの施設数については平均的な市であると言える。

名張市では、名張市社会福祉協議会のふれあい・いきいきサロン事業以前の2002年から、歴史的市街地である名張地区のまちづくり組織である名張地区街づくり推進協議会が、空き店舗を活用したシルバーサロン2施設をオープンしたのを契機にして、市内にシルバーサロンが次々に開設され、2009年1月現在では58個所のふれあい・いきいきサロンが存在する。

なお、名張市社会福祉協議会が運営するふれあい・いきいきサロンは、高齢者だけではなく、子育て世代や地域住民一般を対象にしたサロンも含まれるが、本研究では、利用対象に高齢者を含む40のサロンを研究対象とする。

(5) 研究の方法

第1に、地区社会福祉協議会が置かれている14地区(概ね小学校区)毎に高齢化率と人口密度を算出し、歴史的形成過程を踏まえた地区特性を整理する。

第2に、シルバーサロンの管理者にアンケート調査を実施し、管理運営の実態を明らかにした上で、シルバーサロンの分類を行う。

第3に、最初に開設された2施設を選定し、地域住民へのアンケート調査及びサロン利用者へのヒアリング調査を実施することにより、シルバーサロンの利用実態を明らかにする。

第4に、「サロンへの参加経験があると管理運営の協力意志が生まれやすい」という仮説を立てて、シルバーサロンの参加の有無と管理運営の協力意思の有無の相関関係を分析する。

第5に、運営管理者の悩みと利用者のサロンへの要望を整理し、これらを解決するための方策を検討する。

第6に、以上の知見を踏まえて、シルバーサロンの管理運営の実態及びシルバーサロンの利用向

上のための条件を考察する。

2. 地区特性の分析～人口密度・高齢化率・歴史的形成過程に着目して

名張市は、地区社会福祉協議会の置かれている14地区（概ね小学校区）に分けられる。これらの14地区をその歴史的な形成過程・人口密度・高齢化率から中心市街地型、住宅団地型、農山村型の3つの型に分類した（図2）。

（1）中心市街地型

人口密度は中密で、高齢化率は高い。1地区（名張）が該当する。城下町を基盤とする歴史的な市街地であり、地域コミュニティが成熟し、様々な年齢層が生活している。近年では、中心商店街の衰退や空き家の発生等の問題を抱えている。

（2）住宅団地型

人口密度が高く、高齢化率が概ね低い。5地区（桔梗が丘・すずらん台・つつじが丘・百合が丘・梅が丘）が該当する。これらの地区には、戦後に市街地の縁辺部に広がる丘陵地を新規造成開発された住宅団地が多く立地している。若年層が多く居住しているため、高齢者対策以外に子育て対策等の福祉サービスも必要だと考えられる。

（3）農山村型

人口密度が低く、高齢化率は高い。8地区（国津・綿生・薦原・赤目・比奈知・蔵持・箕曲・美旗）が該当する。人口が少なく、高齢者が多いことから、シルバーサロンの管理運営は地区内住民のみでは困難であり、他の地区や行政等からの支援が必要になると考えられる。

3. シルバーサロンの管理運営の実態

（1）アンケート調査の概要

40のシルバーサロンの運営管理者に管理運営に関するアンケート調査を実施した。アンケート調査の概要は、1）調査期間：2008年12月～2009年12月⁽³⁾、2）配布数：40、3）回収数：36、4）回収率：90%、である。

（2）活動内容について

1）開催頻度～全般的に低い

開催頻度については、名張市社会福祉協議会のHPの情報から分析を行った。全体としては、「月に1～2回」以下が78%（40施設中31施設）と開催頻度は全般的に低い（図3）。型別で見ると、中心市街地型では「週1～2回」以上が57%（7施設中4施設）と開催頻度が高く、逆に農山村型では、「月に1～2回」以下が92%（14施設中13施設）と開催頻度が低い。

次に「月に1～2回」以下の施設について、アンケート調査で開催頻度が低い理由を尋ねたところ、「運営協力者の担い手がない」（33%・9施設）、「運営管理者の担い手がない」（30%・8施設）、

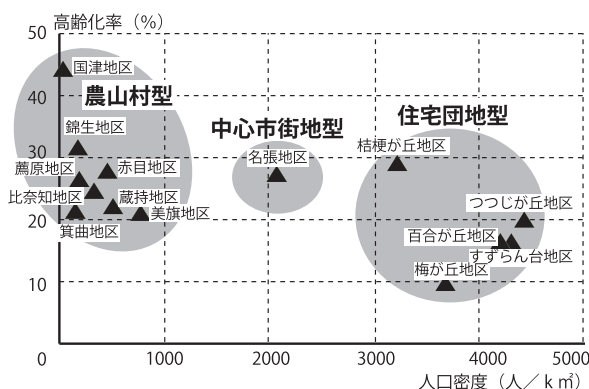


図2：地区類型（高齢化率と人口密度）

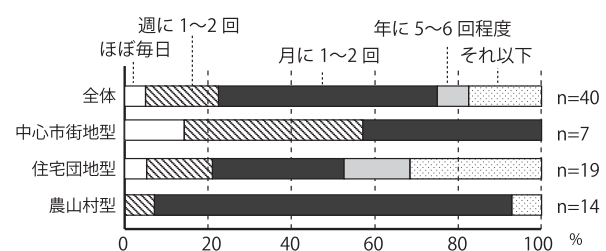


図3：サロンの開催頻度 (SA)

「運営資金がない」(26%・7施設)、「プログラムが少ない」(22%・6施設)といった意見が多く聞かれた(図4)。

2) プログラムの有無～ほぼ半分でプログラムあり

カラオケ大会や料理教室等のプログラムの有無について尋ねた結果、全体では、ほぼ半数が「ある」と答えた(58%、21施設、図5)。プログラムの内容については、体操、手芸、映画・ビデオ等の鑑賞、健康診断、カラオケなどが多く見られた(図6)。

プログラムの有無別に参加者数をみると、プログラムありで「30人以上」の参加者数が多くみられた(図7)。

3) 活動場所～集会所で多く開催

活動場所については、名張市社会福祉協議会のHPの情報から分析を行った。全体として集会所利用が大半を占める(40施設中23施設、58%)。型別でみると、中心市街地型で個人宅や店舗が多いことが特徴的である(図8)。

(3) 運営体制について

1) 運営管理者～高齢者が運営

運営管理者の人数は、平均3.2人である。年代については、いずれの型でも65～74歳の前期高齢者世代が多い(図9)。すなわち、高齢者が高齢者を支えていると言える。運営管理者の属性は民生委員が特に多く(20施設)、区の役職者(11施設)、地縁組織の役員(7施設)と続く(図10)。

2) 運営協力者～若い世代が多く見られる

運営協力者の存在は36施設中32施設で確認された。平均人数は9人である。年代は65～74歳(18施設)、21～64歳(18施設)、と運営管理者に比べて若い世代が多いことが特徴である(図9)。また、運営協力者の属性は、あらゆる属性が分布していると言える(図10)。

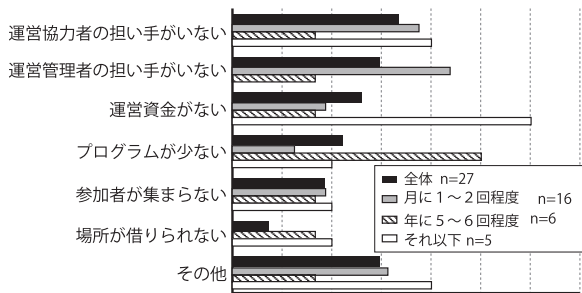


図4：開催頻度が少ない理由(MA)

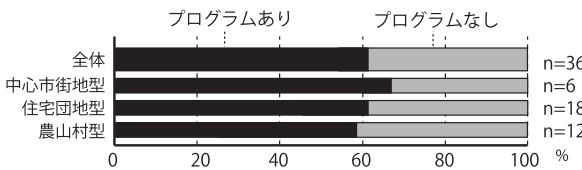


図5：プログラムの有無(SA)

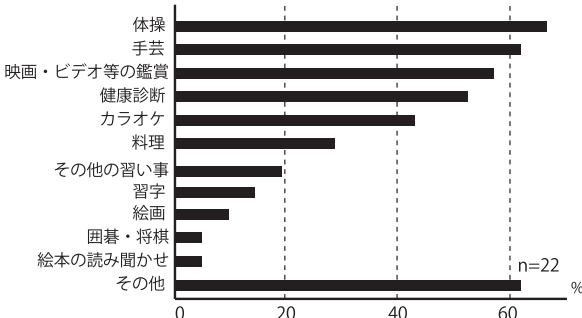


図6：プログラムの内容(MA)

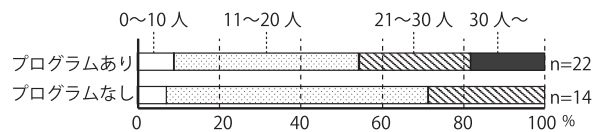


図7：プログラムの有無別の1回の参加者数

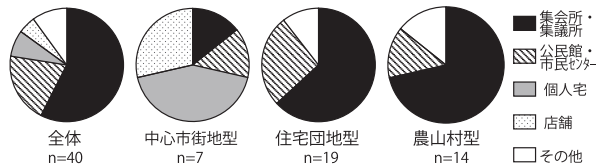


図8：活動場所

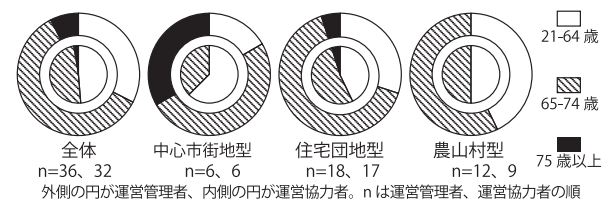


図9：運営管理者・運営協力者の年齢層(MA)

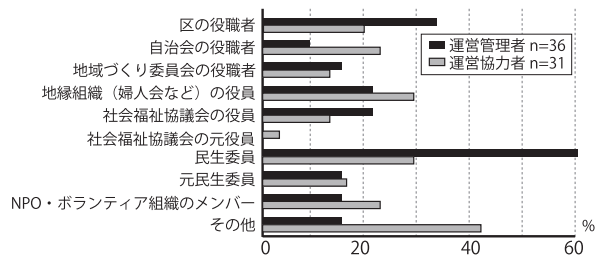


図10：運営管理者・運営協力者の属性(MA)

(4) サロン運営の問題点～予算・担い手・プログラム

サロン運営に関する問題点について尋ねた結果、「予算が少ない」(15施設、44%)、「参加者が限定されている」(12施設、35%)、「運営協力者の担い手がない」(11施設、32%)、「運営管理者の担い手がない」(9施設、26%)、「プログラムの種類が乏しい」(8施設、24%)が多い(図11)。これらの結果から、予算が少ないこと、運営管理者・運営協力者の担い手不足、プログラムがない又は少ないために参加者が限定されていることを問題と感じていることが分かる。

(5) シルバーサロンの分類

以上の分析から、運営管理者・運営協力者の存在が管理運営面で重要であることが分かった。運営管理者の存在に強く依存する開催頻度と運営協力者の存在に強く依存するプログラムの有無に着目し、この2軸により、サロンを4つの型に分類した(図12)。第1に、「開催頻度:低、プログラム:無」のA型で、12施設が該当する。第2に「開催頻度:低、プログラム:有」のB型で、19施設が該当する。第3に、「開催頻度:高、プログラム:無」のC型で、4施設が該当する。第4に、「開催頻度:高、プログラム:有」のD型で、1施設が該当する。

4. 地域住民のシルバーサロンとの関わり

(1) 調査対象サロンの概要と調査の概要

名張市のシルバーサロンの中で、最初期に開設された2つのシルバーサロン(「よってだーこ1号」(以下、1号)・「よってだーこ2号」(以下、2号))を対象として地域住民の関わりに関するアンケート調査を実施した。両事例とも中心市街地に位置しており、活動場所は店舗、サロンの類型については、1号がB型で2号がC型である。なお、D型に属するサロンはビニルハウス園芸用地を活動場所としており、週に1～2回程度、園芸・花卉・野菜づくりを行っているが、活動場所が特殊

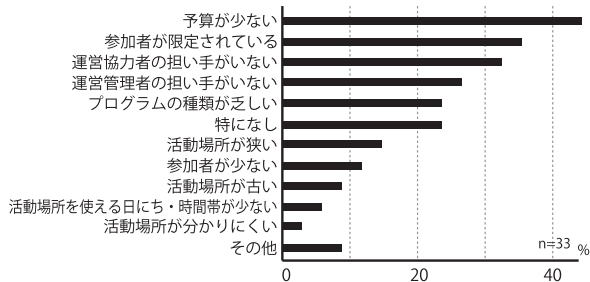


図11: サロン運営に関する問題点 (MA)

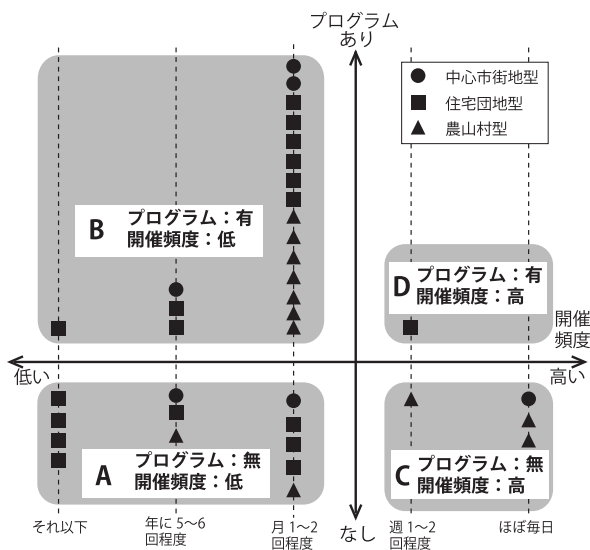


図12: サロンの類型

(プログラムと開催頻度の2軸)

表1: 分析対象サロンの概要

サロン名	よってだーこ1号	よってだーこ2号
町名	松崎町	東町
運営母体	名張地区社会福祉協議会	名張地区社会福祉協議会
利用対象	65歳以上の高齢者	町内の高齢者
参加者数	5～6人程度	10人程度(1日)
開館日	月2回(第2・4火曜日)	毎週月～金
場所	空き店舗	店舗の一部
収入源	補助金+昼食代500円/人	補助金+コミュニティビジネス
平面図		
運営管理者	前区長	店の経営者
運営協力者	町内のボランティア、民生委員	特になし
プログラム	あり	なし
活動内容	血圧測定、健康アドバイス、おてたま、トランプ、おはじき、ビデオ鑑賞、ギターの演奏会など	おしゃべり、手芸、祭りなど地域のイベントに参加
開館日の時間帯別利用状況(4)		

であることから調査対象としない。

調査の方法として、第1に、両施設が立地する町の地域住民向けにアンケート調査を実施した。調査の概要は、1) 調査期間：2008年12月～2009年1月、2) 配布・回収の方法：訪問配布郵送回収、3) 配布・回収の状況：松崎町（1号）：世帯数153・訪問数：106・配布数：83・回収数：45・回収率：54%・回答者中65歳以上の率：32.5%、東町（2号）：世帯数390・訪問数：152・配布数：126・回収数：55・回収率：43%・回答者中65歳以上の率：49.0%、である。第2に、両施設の利用者ヒアリング調査を実施した。調査の概要は、1) 調査日：1号 2009年1月13日（日）、2号：2009年1月15日（木）・16日（金）、2) 対象者数：1号：10名、2号：4名、3) ヒアリング内容：参加したきっかけ・声かけの現状・生活の違い・サロンへの要望、である。

1) サロンの認知度と参加経験

「サロンを認知している」と回答したのは、1号では40/45（89%）、2号では43/55（78%）

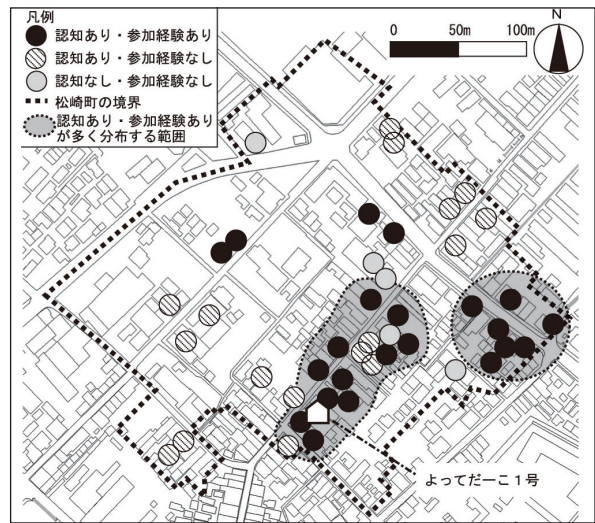


図13：よってだーこ1号の認知度と参加経験⁽⁵⁾

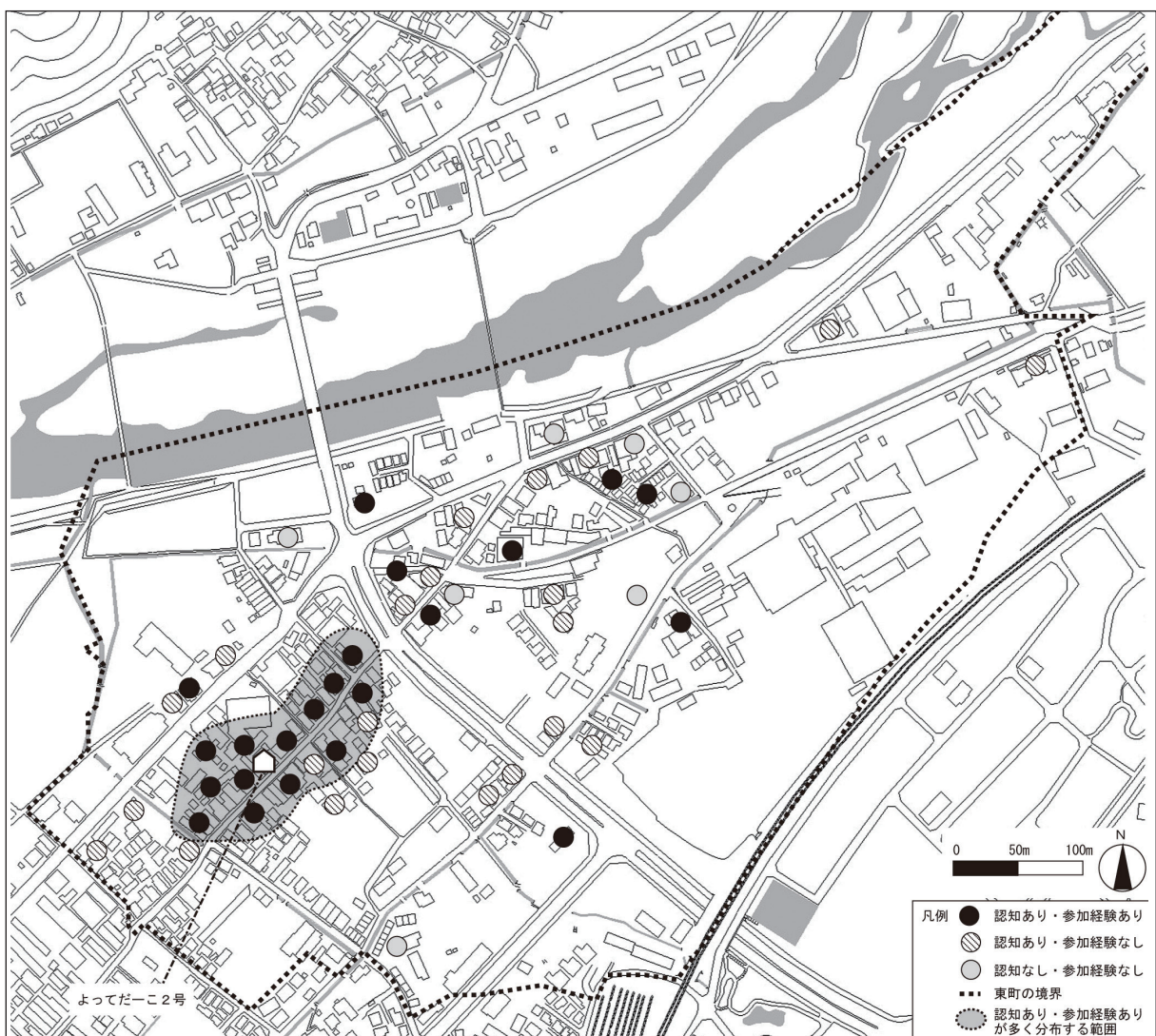


図14：よってだーこ2号の認知度と参加経験⁽⁵⁾

と開催頻度の少ない1号の方が若干高い。サロンの参加経験についても、1号は22/45（49%）、2号は23/55（42%）と開催頻度の少ない1号の方が若干多い。なお、両施設ともに64歳以下の参加も見られる⁽⁴⁾。次に、サロンの位置と自宅の位置を地図にプロットした結果、両施設ともにサロン周辺で参加経験のある人が多く見られることが分かった（図13、図14）。特にサロンの立地する街路沿いに多く分布している。例外的に、1号では図13の右側に囲った範囲に「参加経験あり」の人が集中していたことから、ヒアリング調査でその詳細を尋ねた結果、一人の参加者が近所の人に声をかけて参加を促していたことが分かった。

参加したきっかけについて、ヒアリング調査で尋ねた結果、「誘われたから」という回答が多く聞かれた（図15）。そこで、サロンへの参加を呼びかける声かけについてヒアリング調査で尋ねた結果、「近所の人に声をかける」や「回覧板をまわす」という意見が見られた（図16）。

2) 時間帯別の利用状況

両施設で時間帯別の利用状況について調査した結果⁽⁶⁾、プログラムのある1号では、人の出入りがあまりみられなかったのに対して、開催頻度の高い2号では、頻繁な人の出入りがみられた（表1）。

3) 自主財源の確保

両施設ともに補助金以外に自主財源を確保している（表1）。1号では、昼食を希望する参加者に対して昼食代を徴収しており、2号では、利用者がサロンで製作した手芸作品を展示販売し、その利益を施設の維持費に回している。また地域の祭りや公民館のイベントに参加して田楽や焼きそばを売ることもある。

(3) 参加の有無と協力意思の有無の相関関係

参加の有無と協力意思の有無の相関関係について調べた結果、1号では、（協力意思あり）/（参加経験あり）=17/21（81%）、（協力意思あり）/（参加経験なし）=3/18（17%）だった。同様に、2号では、12/21（57%）、2/22（9%）だった。これらの結果から、両施設ともに、参加経験が協力意思につながるということが分かった。両施設を比較すると、開催頻度の低い1号の方が協力意思ありの人が多。2号のアンケート調査の自由意見の欄には、「個人的な付き合いの集まりのようで、初めての人の訪問は出来にくいと思われる」や「何をしておられるのかわからないので、活動の内容・行事の予定表等、回覧板でもよいので伝える手段が欲しい」という意見があった。2号では参加者が固定化されているため、常連の参加者以外は入りにくい雰囲気にあるようである。また、2号では、店舗経営者が施設の管理を担当し、プログラムを持たないことから、協力する必要がないと思われる」と想定される。

ヒアリング調査で協力意思について尋ねた結果、半数が協力意思があると回答し、「できることは協力したい」といった意見が多く聞かれた（図17）。一方、協力意思なしでは、「誰かがやってくれれば」といった意見が多く聞かれた。

(4) サロンに求めるもの

サロンに求めるものとして、「幅広い年代の人に来てほしい」（26%）、「新しい活動プログラムがほしい」（21%）、「地域に対して情報を発信してほしい」（21%）、の3つが多く聞かれた（図

誘われたから	時間がかきたので
● 去年の夏から参加しています。いつも一緒にいる近所の方に誘っていただいて参加しました。(71歳、女性)	■ 親もいないし、旦那も退職したので時間が出来て参加しています。(60代、女性)
● 以前から参加している人に誘ってもらって、来るようになりました。(73歳、女性)	● 知っている人も減っていき、家にもこもりがちになっていたの、外に出るきっかけになればいいなあと思いつきました。(83歳、女性)
● 誘ってもらってくるようになりました。みんな仲良しで、楽しみにしていますよ。(77歳、女性)	
● 4～5年くらい前から来ています。前から来ていた人に誘われて、参加しました。(82歳、女性)	
● 区長さんのほうで話を聞きました。こういうサロンを発足するので協力してほしいと言われました。だから最初から参加していますね。(75歳、女性)	

●: よってだーこ1号、■: よってだーこ2号

図15: 参加のきっかけの内容（ヒアリング調査より）

近所に声かけ	しない
● 近所の人には声をかけるようにしているんですが、来ないひとは来ないですね。(73歳、女性)	■ 特に今は声かけはしていません。通りがかった人が自然にやってくる感じですが、対象者も特に定めていません。(78歳、女性)
● 近くに住んでいる方に声はかけることはありますね。(75歳、女性)	■ 高齢者のかたには自然によってきてもらっています。(60代、女性)
回覧板	
● 回覧板とかは回ってきます。新年会とか特別なものときは、それ以外のときは日にちが決まっているので、時間があればのぞいています。(71歳、女性)	
● 回覧板はまわっています。(75歳、女性)	

●: よってだーこ1号、■: よってだーこ2号

図16: 声かけの内容（ヒアリング調査より）

協力意思あり	協力意思なし
● なんかできたらお手伝いしたいし、何か言ってもらえれば…。ただぼーっとしているだけじゃなくお茶汲みとかでもできればね。難しい運営とかは経験のある方に任せていますね。(71歳、女性)	● 役員みたいなのはしていましたが、今は若い人に任せていますね。ただ、高齢者のかたはきつかけがないと外に出ないので、サロンがきつかけの場になってほしいと思っています。(75歳、女性)
● なにか協力できることがあればいいですけれど。(83歳、女性)	● なかなか参加できないので、このまま皆さんにやってもらいたいですね。(82歳、女性)
■ 協力できることがあれば言ってほしい。(60代、男性)	● 今後みなさんにやっていただきたいですね。(82歳、女性)
■ 車だとか、出来ることはしようと思っかけています。(60代、女性)	● 私には出来ないと思いますね。皆さんにやってもらいたいです。(72歳、女性)
● よってだーこ1号	● ボランティアの人が良くてくれるので、考えたことがないですね。(73歳、女性)
■ よってだーこ2号	

図17: 協力意思あり・なしの内容（ヒアリング調査より）

18)。1号では、2号と比較して、「もっとたくさんの人に来てほしい」(15%)、「もっと頻繁に開催してほしい」(12%)、「活動内容を発表できる機会がほしい」(12%)、が多く聞かれた。2号では、1号と比較して、「幅広い年代の人に来てほしい」(29%)が多く聞かれた。

5. 結論

(1) 管理運営の実態

三重県名張市のシルバーサロンについて管理運営の実態について開催頻度・プログラム・管理運営を担う人材に着目して分析した結果、以下の結論を得た。まず、開催頻度については、「月に1～2回程度」以下の開催頻度が低いサロンが多数あることが分かった。これらのサロンは、気軽に立ち寄れる地域の居間としての機能を果たしていないと言える。プログラムについては、約6割のサロンでプログラムがあると回答し、「プログラムあり」のサロンは参加者数が多い傾向にあることが分かった。管理運営を担う人材については運営管理者と運営協力者に分けて分析した結果、運営管理者については高齢者が多くみられ、運営協力者については高齢者に加えて若い世代の協力が見られた。

(2) サロン利用が向上する条件

まず、研究の仮説から結果を整理する。第1に、「開館頻度が高ければ、気軽に立ち寄ることができる」については、月曜日から金曜日まで開館している2号で、開館から閉館まで頻繁な利用者の出入りがみられた。第2に「サロンで活動プログラムやイベントがあれば、新規参加者は参加しやすいこと」については、プログラムがあると参加者数が多くなることが分かり、プログラムが無くて常連の利用者が多い2号では初めての人は入りにくいという意見がみられた。第3に、「管理運営を担う人材の発掘が必要である」については、管理運営者に対するヒアリング結果から運営管理者及び運営協力者の担い手不足が問題点として明らかとなった。

次に、運営管理者の悩みと利用者の要望を解決するための方策と具体的なメニューについて、アンケート調査・ヒアリング調査の結果を踏まえると、図19のように整理できる。これらの結果から、サロン利用向上のための対応を3つ挙げる。第1に「担い手の発掘」である。参加経験が協力意思を生み出すことから、担い手を増やすためには、参加者を増やす必要がある。そのために、第2に「情報の発信」である。定期的にミニイベントや情報発信を行い、新規参加者を増やすことで、担い手発掘につながることを期待できる。特に、知り合いから声をかけられると参加しやすいことから声かけは有効である。第3に「財源の確保」である。財源については、事例分析で挙げた2事例で見られたように食事代等の利用料を徴収したり収益事業を実施するなど、自主財源を増やすことがプログラ

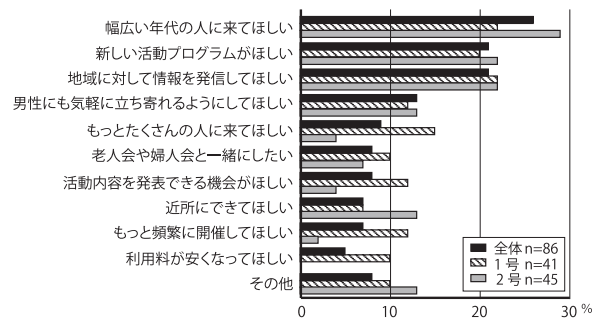


図18: シルバーサロンに求めるもの (MA)

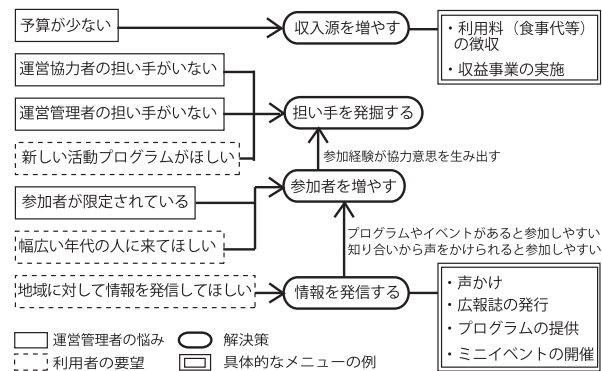


図19: 持続可能な運営のための条件整理

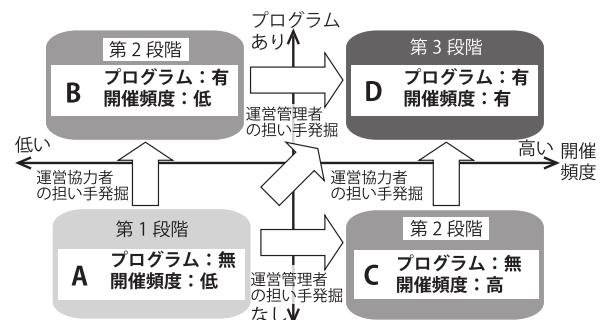


図20: シルバーサロンの発展段階モード図

ム提供や施設の安定的維持につながると考えられる。

以上の研究結果を踏まえ、地区特性毎の課題とシルバーサロンの発展段階について付記する。

まず、地区特性別にみると、中心市街地型では、空き店舗が多く存在し、商業者が多く居住することから、空き店舗を提供したり、店舗経営とシルバーサロンの運営を併用するといった商業者との連携を図ることが可能である。住宅団地型では、NPO・ボランティアグループ等の市民活動に関わる住民が多く居住していると推測されることから、彼らを運営協力者として招き入れることで、様々なプログラムを提供し、シルバーサロンの有効活用を図ることが課題となろう。現状では、市民活動組織のメンバーは運営協力者に多く含まれていないことから、今後は市民活動組織をうまく取り込む工夫が必要とされる。農山村型では、地区内に担い手が少ないため、他地区から運営協力者を募る必要がある。

「開催頻度が高いほど気軽に立ち寄れること」と「プログラムがあると参加しやすいこと」という研究の仮説より、サロンの発展段階を考えると、図 20 のような 3 つの段階があると推察される。施設の立地等の諸条件に適合するサロンの運営方法を適切に設定し、漸進的に改善していくことが望ましい。持続的な運営のためには、無理に発展させようとするのは危険なため、身の丈にあった形で徐々にステップアップしていく必要があるだろう。

【謝辞】

本研究の一部は(財)岡三加藤文化振興財団の研究助成を受けた。また、本稿の一部は岡田恵君(NTT都市開発)・立石千佳子君(住友林業ホームテック)・中川怜香君(藤沢市役所)との共同研究の成果である参考文献(6)～(8)の内容に加筆・修正を加えたものである。アンケート調査及びヒアリング調査にあたってはシルバーサロンの管理者・利用者等の関係各位に多大なご協力を頂いた。ここに記して感謝申し上げる。

【補注】

- (1) 名張市社会福祉協議会のHP (<http://www.nabarishakyo.jp/chiiki/salon/index.html>) では、ふれあい・いきいきサロンを「地域でお住まいのお年寄りや子育て中の親子を対象に、地域住民やボランティア主体により、各地の公民館や集会所等を利用し、集まって過ごす「憩いの場」と定義している。本稿では、ふれあい・いきいきサロンの中でも高齢者を対象とするものをシルバーサロンと定義する。
- (2) 「ふれあい・いきいきサロン」については、参考文献(1)に詳しい。
- (3) まず、2008年12月～2009年1月に実施し、24の回答を得た。次に未回答の16サロンに対して同様の調査を2009年10月～2009年12月に実施し、12の回答を得た。
- (4) 高齢者以外の参加率・高齢者の参加率はそれぞれ、1号では、48%・43%、2号では38%・45%である。
- (5) 地図は「ゼンリン電子地図帳 Zi11 西日本版 DVD」を使用した。
- (6) 時間帯別利用状況調査は、1号・2号ともに2004年10月12日(火)に実施した。

【参考文献】

- 1) 全国社会福祉協議会地域福祉協議会:「ふれあい・いきいきサロン」のてびき～住民がつくる地域交流の場、2008
- 2) 宮崎幸恵・鈴木博志: 自立高齢者支援施設について～高齢者の住生活を支援する社会的仕組みづくりに関する基礎的研究、日本建築学会技術報告集 14、p.p.279～284、2001
- 3) 小松尚・辻真菜美・洪有美: 地域住民の居場所となる交流の場の空間・運営・支援体制の状況 - 地域住民が主体的に設立・運営する交流の場に関する研究 その1、日本建築学会計画系論文集 611、p.p.67～74、2007
- 4) 中村久美: 地域コミュニティとしての「ふれあい・いきいきサロン」の評価、日本家政学会誌 60(1)、p.p.25～37、2009
- 5) 森常人: 高齢者を対象とした地域社会での人間関係の構築と生きがいの形成のための一考察～ふれあい・いきいきサロンと小地域交流サロンによる事例をもとに、政策科学 16(1)、p.p.87～101、2008
- 6) 中川怜香・浦山益郎・松浦健治郎・桜井康宏・原田陽子: 地域が開設運営する高齢者の居住継続を支えるシルバーサロンの実態に関する研究 三重県名張市の場合、日本建築学会学術講演梗概集 F -1、p.p.973-974、2006
- 7) 松浦健治郎・浦山益郎: 地域福祉を支える「地域の居間」としてのシルバーサロンに関する研究その1 三重県名張市におけるシルバーサロンの管理運営の実態、日本建築学会東海支部研究報告集第 48 号、p.p.525-528、2010
- 8) 松浦健治郎・浦山益郎: 地域福祉を支える「地域の居間」としてのシルバーサロンに関する研究その2 地域住民によるシルバーサロンの持続的運営が可能な条件整理、日本建築学会東海支部研究報告集第 48 号、p.p.529-532、2010